

県中教研 特別活動部会だより

第 38 号

発行日 令和5年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 山本 泰
題 字 金山 泰仁 先生

問題の「問題性」に気付く

指導主事 大茂孝二郎

研究主題「学級活動を通して身に付けるべき資質・能力を育成するための指導はどうあればよいか。一生徒が主体的に参加し、合意形成や意思決定を目指す話し合い活動を通してー」の下、授業研究が行われました。

舟橋村立舟橋中学校では、学級の生活課題に対する解決策について話し合う授業や、よりよい学習環境をつくるための取組について学級全体で合意形成に向かう授業が展開されました。その中で、課題に対して切実感をもって、主体的に話し合いに臨む生徒の姿が見られました。

さて、学習指導要領解説特別活動編には、学級活動の学習過程の例が図示され、基本的な学習過程を繰り返す中で、年間を通して資質・能力を育成することが述べられています。この学習過程のうち、「問題の発見・確認」の局面では、アンケート結果を学級全体で分析することで問題を明らかにし、議題や題材を設定するなどの実践が見られます。このときに大切なことは、問題の「問題性」に迫ることだと思います。すなわち、何が、どのようになっていることが問題なのか、誰にとって、なぜ問題だと考えられるのか、このままだとどうなるのかなど、目の前のアンケート結果を自分たちの生活レベルで分析していくのです。問題の「問題性」に気付くことで、生徒の問題意識が高まり、話し合いたい議題や題材となっていきます。舟橋中学校の授業で、生徒が積極的に話し合いに参加することができたのも、「問題の発見・確認」の局面を丁寧に扱ってきたからだだと思います。

この先、社会に見られる課題は、ますます複雑化、困難化することが予測されます。生徒が、将来、このような社会で活躍していくことができるように、問題に気付く目を育て、主体的に問題を解決しようとする社会参画の力を育んでいきたいものです。

(東部教育事務所)

「合意形成」や「意思決定」の能力の育成

部長 山本 泰

新学習指導要領では「『特別活動』の改善」の視点の一つとして、「特別活動の学習過程の中には『合意形成』と『意思決定』があり、このプロセスを踏むことが大切である」ことが明示されています。しかしながら、この二つの学習過程について我々教師の理解が不十分であることや話し合い活動における「合意形成」や「意思決定」が学習過程の中で実現されているかということについて教師と生徒の間に認識のずれがあることから、今年度も「学級活動を通して身に付けるべき資質・能力を育成するための指導はどうあればよいか。一生徒が主体的に参加し、合意形成や意思決定を目指す話し合い活動を通してー」を研究主題として研究を進めました。

第66回研究大会では、東部地区は舟橋村立舟橋中学校、西部地区は高岡市立志貴野中学校を会場として研究大会を開催することができました。昨年度に比べて多くの先生方に参加していただくことができたことは大変有意義でした。

学校全体で統一された学び合いのスタイルに基づいた話し合い活動や学校行事に即したタイムリーな議題の設定、生徒の活動への意欲を向上させるためのロールプレイの活用等、スムーズな「合意形成」「意思決定」に向けて様々な工夫を凝らした授業が展開され、大変参考になりました。

一方、議題を設定する際の内容や方法、学習形態の取り入れ方にはまだまだ改善すべき点が多くみられ、今後さらに研究を深めていく必要性を感じました。

ここ数年の研究によって、特別活動部会では「合意形成」と「意思決定」についての理解を深めることができました。今後、各学校においての理解をさらに確実にし、特別活動の学習過程で「合意形成」と「意思決定」が行われることによって、生徒の自発的・自治的な「自己実現」「人間関係形成」「社会参画」への意欲の向上を図っていければと思います。

(富・興南中)

第66回 富山県中学校教育課程研究大会

東部地区（舟橋村立舟橋中学校）

東部地区大会では、舟橋村立舟橋中学校を会場として、清水修教諭、相田健悟教諭、柄崎安弘教諭による授業提案が行われた。各学年、「内容（１）ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決」に関して工夫した話し合い活動が展開された。

（第１学年）清水 修 教諭

題材名 よりよい学校生活に向けての話し合い

個人の考えたことを認め合いながら少人数の班での話し合いが主体的に進められる授業が展開された。事前アンケートの集計をグラフで提示したり、個人の意見を付箋に書いて貼っていったりして話し合いが円滑に行われるように工夫されていた。その中で十分に班での話し合いが行われ、次時で学級の約束の見直しを行うための振り返りができていた。部会協議では、「司会者が素晴らしい進行をしていた」「手が止まっている生徒に対して司会生徒が温かく声を掛けていてよかった」、「課題設定について、問題は個人としてのものかクラスとしてのものかを明確にすべきだった」、「付箋を使用した意見の提示もよいが、タブレットを利用した意見提示でもよかったのではないか」等の意見が挙げられた。河内崇指導主事（東部教育事務所）からは、「居場所づくり、自己決定の力、自己有用感を身に付けさせるために特別活動を充実させることの大切さ」、「話し合い活動を充実させるために生徒から湧き出るような課題を設定する重要性」、「振り返りを基に次の課題解決につなげる大切さ」等について助言をいただいた。

米多 拓也（下・入善西中）

（第２学年）相田 健悟 教諭

題材名 学級における生活作りへの参画

学級の諸問題に対する解決策を発表し、各グループの提案について検討を行った。話し合いのポイントを踏まえて説明したり、自身の経験に触れながら提案したりと、合意形成を目指そうとする生徒の姿が見られた。また、生徒が本



音で語っている姿や違う立場を思いやりながら発表している姿も見られ、良好な人間関係の下で本時の話し合い活動が展開されていた。部会協議では、「話し合いの中での役割分担や学習形態の工夫はどうあるべきか」、「論点をどのように整理し、焦点化するか」、「クラスの問題点だけでなくクラスのよさも再認識させる必要があるのではないか」といった意見が出された。大茂孝二郎指導主事（東部教育事務所）からは、「話し合うべき生活上の問題を検討する際には、目指す学級像を明確にすること」、「問題を把握し共有する中で、解決すべき事柄を精査すること」、「合意形成の手順の中で相手の意見を傾聴することが大切であること」等の大切さについて助言いただいた。

村田 直樹（富・呉羽中）

（第３学年）柄崎 安弘 教諭

題材名 入試に向けての学習環境づくり

生徒が自由に意見を言い合い、認め合う温かい雰囲気の中、ＩＣＴ機器を活用して意見を全体で共有し、学級の改善案を話し合う授業が展開された。本時までに学級の改善点や改善策の案について話し合いが行われており、本時では、その案の中から実践する策を決定し、さらにより活動になるよう、改善策を練る話し合いが展開された。部会協議では、「生徒の自由な発想を生かした改善策がよかった」、「互いの意見をしっかり聞き、認め合う雰囲気があった」、「話し合いの充実には生徒同士の信頼関係が重要である」、「話し合いの目的を明確にし、共通理解することが大切だ」、「少数派の意見をどう生かすかが課題だ」等の意見が挙げられた。河田美保指導主事（東部教育事務所）からは、「合意形成と意思決定の場を設けること」、「合意形成に基づいて、自分が何をすべきか意思決定をすることで自分事として捉えること」、「集団場面で行われるガイダンスと個別に行うカウンセリングの双方の趣旨を踏まえた指導を行うことで、スパイラル的に生徒の成長を促すこと」等について助言をいただいた。

日水 恵理（黒・清明中）



第66回 富山県中学校教育課程研究大会

西部地区（高岡市立志貴野中学校）

第2学年では、「『社会に学ぶ『14歳の挑戦』』をよりよいものにしよう」という題材で授業を行った。

1週間後に控えた「14歳の挑戦」を題材とすることで、生徒に切実感をもたせたり、キャリアパスポート「2年生になって」を活用して自分の将来の夢や目標、それらを実現するためにすべきことを想起させたりすることで、多くの生徒が主体的に取り組めるような手立てがなされていた。

本時では、話し合い活動を行う前に事前に収録した「14歳の挑戦」のロールプレイを行った動画を視聴させた。「時間を守らない」、「敬語を使わない」等がよくないことを、実際に自分で演じたり、客観的に見たりすることで、情景をイメージしやすくさせ、それらの行動がなぜよくないかを焦点化させた。その後は、個人での考えを、班、クラス全体と共有していくことで「14歳の挑戦」に向けて、今後自分が取るべき行動を具体的に考えて意思決定を行わせた。

協議会では、「生徒にとって切実感のある課題だったので、自分事として捉え意欲的に取り組む生徒の姿を見ることができた」、「受け入れる事業者の方の意見や、保護者の考えを示し見せることで職業体験における責任が生徒によく伝わっていた」、「ロールプレイは、テレビ番組を模したものであったので、生徒の関心を高めただけでなく、評価する側が明白な視点で自分の考えを話すことができていた」という意見が出た。また、事後の取組の視点から、意思決定したことに対して、日々振り返りの場面を設定できれば、意識の継続が可能ではないかという意見も出た。

第3学年では、「進路選択に向けて自分を振り返り具体的な行動目標を考えよう」という題材で自分が今まで頑張っており組んでいる具体的な勉強方法、生活の仕方などについて確認し、これからの進路選択に向けて、自分に合った具体的な行動目標を考える授業を行った。

本時では、話し合い活動を充実させるために、生

徒に前時までに「自分ノート」等を用いて、今までの自分の活動を見つめ直し、自分が今まで頑張ってきた具体的な行動や勉強方法、生活の仕方などについて考え、「取組カード」を作成させた。班活動では、「取組カード」がどこに当てはまるか分類活動を行った。班内で頑張っていることや、うまくいかないこと等を出し合い、話し合ったり、他の班の取組や多様な意見を聞いたりすることで、新たな発見や自分の取組について考える機会となった。終末では、タブレット端末を活用し、本時の終末にアンケートを実施し、学級全体での多様な考え方やさまざまな意見について、視覚的に情報を共有した。短時間で分かりやすく情報を取得することができ、よりよい意思決定につながっていた。

協議会では、「『自分ノート』や『取組カード』を用いることで、生徒がこれまでの自分の取組を俯瞰してみることができたので、自分の現状を把握しやすく、効率的に課題に迫ることができた」、「話し合いのひな型や、パーテーションを利用した分類等、話し合いが円滑に進むような工夫がなされていた」といった意見が出た。パーテーションを利用することで、視覚的に意見を把握しやすいので、生徒が自由に見る時間を設けるなど、生徒同士が関わり合う場面がもっとあれば、さらにより発表につながったのではないかという意見も出た。

新型コロナウイルス感染症対策で、授業会場や競技会場が2つに分けられていた。密を防ぎ生徒の学びの様子を見る上で効果的であったが、交流する機会を設けなかったため、別会場での授業や協議会の様子を把握しにくいという意見もあった。今後も感染拡大の防止と学校教育活動の継続、この両立を図りながら、生徒の学習活動の充実と、教職員の研鑽を積む機会を大切にしていかなければならない。

青柳 崇広（氷・北部中）



学級活動における合意形成を図ったり、意思決定を行ったりする際の効果的な指導方法 ～内容(1)[学級会]の確実な実践を通して～

日本体育大学 体育学部 兼任講師 島田 光美

1 学級活動における話し合い活動

学級活動を進めるにあたっては、そもそも学級の問題を学級の構成員が「問題」として認識しないと始まらない。問題意識をもつことは「学級生活を改善、向上させたい」という課題意識につながる。そのために、教師にも生徒にも問題を収集する観察力やネットワークが必要である。

「問題」が出た際には、それを「課題」として整理し、生徒にとって切実感のあるものとする必要がある。その方策として、例えばICTを活用してアンケート結果を提示することは、問題をより焦点化できる。また、生徒主体の活動とするのにふさわしいテーマや活動内容にする必要がある。

話し合い活動を行う際、学習指導要領の学級活動の内容(1)～(3)では、それぞれに適した働きかけをすることがねらいを達成するために重要である。

- ・ みんなが一緒に協力することで、学級や学校生活ができるようになる「共同の問題」に対しては、内容(1)で取り扱う。例「一学期を振り返り、よりよい学級を目指そう」教師の指導の下、生徒が議題を選定し、知識や経験を基にし、自治的な活動の範囲内で「合意形成」を行う。「自分たちの生活を自分たちでよくしていこう」「自分たちで決めたことは自分たちで守っていこう」という「われわれ意識」を高めることが集団の成長につながる。
- ・ 一人一人状況は違うが、抱えている悩みや不安は同じである「共通の問題」に対しては、内容(2)(3)で取り扱う。例「集団生活におけるルールとマナー」年間指導計画に基づき教師が題材を設定し、仲間との意見交換を経て、最終的に自己の問題解決に向けた「意思決定」を行う(ガイダンスの機能を生かす)。仲間の問題も他人事にしないで、「よりよい自分」を考えることで集団の成長につなげる。

2 議題の発展性

学級経営の充実と相応し、生徒の成長状況は「議題の文言」に表れる。学級の成長に伴って、生徒が選定する「議題」は明確なものとなっていく。教師の働きかけとしては、議題を発展させるために、「なりたい姿」の言葉の意味を具体的に問うことが大切である。「仲よくなりたい」という議

題に対して、「仲がよいこと」の意味を問う。「協力して〇〇を行う」、「助け合うことが多くなる」等、言葉の意味を生徒が具体的にイメージできることが大切である。次に、今の学級にとって「切実感のある議題」かどうかを問う。議題の切実感を高めるには、「実態」を把握し、そのねらいを問う。例えば「レク大会を行い、一人一人が参加できる取組を考え、学級への所属感を深める」となる。学級への“生徒の好意的な眼差し”がないと、学級は発展していかない。常に教師が「到達すべき学級の実態」を生徒と共有し、学級が発展するような実践に挑戦できるよう学級経営を進めることが必要である。

発達段階的に、中学生にとっては、決めたことを自分たちの力で具体的に実行できる議題を選定することがポイントとなる。学級における自治的能力の育成が、学年・学校と規模を広げて発揮されることが、よりよい校風をつくり上げる。

3 提案理由の重み(意義)

議題に対する「提案理由」の文言に込められたねらいを示すことで、「何のために話し合うのか」「学級をどうしたいのか」を明確にすることができる。「提案理由」が話し合いの道しるべとなり、解決方法のヒントとなる。それを踏まえて、今後の実践を見通せることで、話し合いが収束しやすくなる。

4 話し合い活動を支える学級経営

生徒と教師が協力して生徒たちの自発的な態度や一人一人が認められる支持的風土をつくり上げるのが学級づくりである。この考え方を中核におくことで、担任は生徒のよさを認めながら学級経営を行うことができる。そのためには生徒一人一人に役割を与えることが必要である。役割を遂行することが自己有用感を高め、他に認められることで学級への愛着が湧いてくる。そしてもっと学級をよくしたいという向上意識(課題意識)が生まれ、学級会等の話し合い活動につなげることができる。諸活動においては、教師が信じて任せることで、生徒が称賛や反省などを通してステップアップできる。より高みを目指せるように、大人目線まで引き上げて要求する教師の働きかけもときには必要となる。

植木 惇(魚・西部中)